

《報告》実践女子大学短期大学部設立 70 周年記念 特別授業について

今年、短期大学部は設立から 70 周年を迎えた。最初は家政系の学科、その次に文系学科の設立を行い、実践女子学園短期大学として産声を上げた。家政系の 2 学科は、廃科による定員移行と大学生活科学部の一専攻となって今日を迎えているが、文系 2 学科で存在する現在の短期大学部のありようを生かして企画した。

崇城大学名誉教授であり、ロンドン漱石記念館館長の恒松郁生氏に依頼していたが、来日不能になり、一時は実施そのものが危ぶまれた。Zoom 授業で空間と時差を乗り越える提案を行い、コロナ禍を逆手にとる形で実施した。それらについて「学生記者レポート」と受講学生 2 名の感想レポートを以て報告としたい。

(高瀬真理子)

<学生記者レポート> 『漱石と英国絵画』、短大 70 周年を記念して講演

明治の文豪・夏目漱石の英国留学の意義を紐解く特別授業「漱石と英国絵画」が 10 月 13 日（火）、実践女子大学短期大学部設立 70 周年を記念して、オンラインで開催されました。特別講師に漱石作品の英訳で知られる恒松郁生（つねまつ・いくお）崇城大学名誉教授を招き、漱石文学に与えた英国絵画の影響について講演。全体を通し、恒松氏は、「英国留学の経験なくして漱石は語れない。漱石がノイローゼに陥らず楽しいロンドン生活を過ごしていたら、果たして後の作家漱石は誕生していたか考える必要がある」と強調しました。

『漱石と英国絵画』
～ラファエロ前派と英風景画について～

- ・2020年10月13日（火）3限 13：15～14：45
- ・実践女子短期大学部設置70周年 特別授業
- ・恒松 郁生（ロンドン漱石記念館・崇城大学）
- ・Twitter: @sammysoseki facebook: sosekimuseum

特別授業のタイトル

特別授業は、本学短期大学部日本語コミュニケーション学科の高瀬真理子教授が担当する「文学b」の中で実現しました。午後1時15分すぎ、渋谷キャンパス50A教室とロンドン郊外サリー州の漱石記念館、視聴者をZOOM会議で結び、恒松氏が現地時間の早朝5時すぎから1時間半にわたり講義しました。

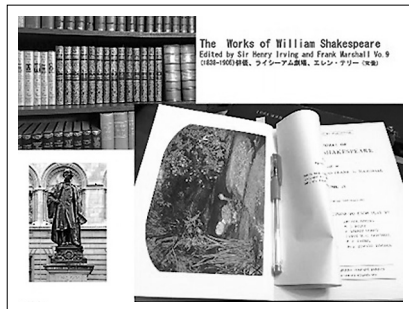
漱石は1900年、33歳の時に渡英し、2年間ロンドンに滞在しました。この留学期間中、漱石が現地ではどんな絵画に触れ、そのことが漱石文学にどのように投影されたかを中心に授業は進行しました。恒松氏は「漱石は英国文学を理解するには西洋絵画の知識が必要不可欠であることを

認識していた」と語り、漱石は作品に絵画を登場させることで、「作品に奥行きを持たせ、読者に想像する世界を残している」と指摘しました。その上で、英国絵画が漱石文学に影響を与えた例として、『草枕』、『三四郎』、『それから』などの作品を挙げました。

このうち『草枕』は、英国人画家ジョン・ベレット・ミレーが描いた絵画《オフィーリア》の影響を挙げました。件(くだん)の絵画は、『草枕』の作中に、「オフィーリアの面影が忽然(こつぜん)と出て来て、高島田の下にすぼりとはまった」というくだりで登場します。恒松氏は「漱石は英国滞在中、テート・ギャラリーでこの傑作を見たものと思われる」と指摘しました。



漱石が訪れた美術館



漱石の蔵書集の中から見つかったミレーの《オフィーリア》の挿絵

《オフィーリア》は、大ロンドン市南西のサリー州にあるトルワース付近のホッグズミル川付近で描かれましたが、世界に先駆けてその場所を特定したのは、他ならぬ日本人の恒松氏でした。恒松氏は「オフィーリアの背景が描かれた場所をずっと探していた。約20数年前に(幸運にも)古文書をもとに見つけた」と話しました。

また、恒松氏は漱石作品『三四郎』に登場する絵画《ストレイ・シープ》の写生場所も「これも私が発見した」と明かします。《ストレイ・シープ》は英国人画家ホルマン・ハントの作品で、描かれた場所はイギリス南東部イースト・サセックス州にある歴史ある海辺の町「ヘイスティングス」の海岸の「恋人たちのベンチ」付近だとしています。

一方、『坊ちゃん』に登場するのは、「光の画家」として知られるJ・M・W・ターナーの《チャイルド・ハロルドの巡礼》です。赤シャツが「あの松を見給え、幹が真っ直ぐで、上が傘のように開いて真っすぐで、ターナーの画にありそうだね」と野だいこに言うと、野だいこが「まったくターナーですね。どうもあの曲がり具合ったらありませんね。ターナーそっくりですよ」と答えるワンシーンです。

『坊ちゃん』の舞台である松山には、この絵画に似た松の生育する島「青島」があり、地元の人はその島を「ターナー島」と呼んでいるそうです。「漱石は非常にターナーの作品が好きで、漱石の中ではターナーの絵画は非常に重要な意味を持つ」と恒松氏は続けました。

『吾輩は猫である』も、英国絵画の影響を大いに受けていました。具体的には、猫画家といわれるルイス・ウェインの絵葉書です。『吾輩は猫である』には「やがて下女が第二の絵はがきを持ってきた。見ると活版で舶来の猫が四五匹行列してペンを握ったり…」というシーンがあり、これはルイス・ウェインの絵葉書に描かれた構図そのものだからです。

【漱石と絵画】

- 「生涯に1枚でもいいから人が見て有難い心持ちのする絵を描いてみたい」津田青楓宛書簡
- 『吾輩は猫である』水彩画家の先生が登場—漱石の絵画への関心
- 『坊っちゃん』『草枕』『それから』『三四郎』『野分』に画家が登場
- 英国文学を理解するには西洋絵画の知識が不可欠であることを認識しており、美術鑑賞をしておりロイヤル・アカデミーやテート・ギャラリーの図録などを購入。
- 「芸術は自己の表現に始まって、自己の表現に終わるものである」
～「文壇と芸術」～
- 「文壇と芸術」は、1912年の第6回文壇について触発され書かれた、漱石唯一の美術展覧会誌。
- 「芸術」第2編3『文学評論』美術協会、ホガース、レノルズ、ウィルソンなどに言及

授業の結論

また、漱石はよく月刊のイラスト入り出版物として知られる『ウインザー・マガジン』という雑誌を読んでいたと言います。雑誌の中でルイス・ウェインの猫の絵がよく出ていたことも要因のひとつだろうとも恒松教授は語りました。



ロンドン市郊外の漱石博物館
(恒松氏の自宅)

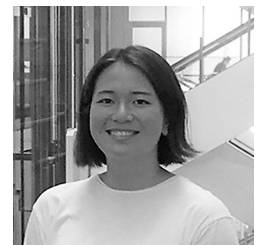
恒松氏は、1951年鹿児島県生まれ。1984年に私財を投じてロンドンのクラバムに漱石記念館を設立し、同館館長に就任しました。2004年から熊本県の崇城大学で教鞭を取り、図書館長、副学長を経て名誉教授。2016年にクラバムの記念館を閉館しましたが、2019年にサリー州の自宅を改装して再開館しました。

高瀬真理子教授の話

コロナ禍で恒松氏の来日も、他大での講演も、中止や延期になりました。記念行事は当年において他はないので、逆手にとってこの状況下での可能性を考えました。ZOOMでの参加者に地方の方々が多かったのは、やはりひとつの可能性を示していると思います。イギリスとライブで繋がったのは本当に良かったと思っています。恒松氏には心から感謝しています。

取材メモ

私は今まで漱石の純文学作品を読むたび、大学の専攻が私と同じ英文学科なのが不思議でした。彼の作品に西洋の要素をさほど感じなかったからです。ですが今回、英国絵画から漱石の作品を眺めると「こんなところにも反映されている」と、思いの外、外国のエッセンスが多い事に気付かされました。そうした漱石作品の奥深さを探すために、もう一度作品を読み直したくなりました。まずは『坊っちゃん』から。



英文学科4年 松村桐杏

受講生感想レポート

日本語コミュニケーション学科 1 年 高橋きらら

今回の特別授業を聞いて、想像以上に漱石は英国の絵画や英風景画に影響を受けていることが分かった。

特に印象に残っているのは、小説を描く上での思想に対する影響だけでなく、実際に作品へ英国で得た美術的経験が引用されていることである。例えば、ダンテ・ガブリエル・ロセティの詩集が『虞美人草』の中で読まれていたり、オスカー・ワイルドのことが『草枕』にて引用されていたりなどである。この話題とは関連性は低いがジェイムズ・マクニール・ホイッスラーが浮世絵の影響を受けていたということも興味深かった。ヴィクトリア女王の時代から日本と英国の文化や芸術が相互に影響しあって新たな絵画や文学を生み出していたと思うと非常に感慨深い。

また、これに伴い西洋絵画の流れを学べたのも貴重な学びであった。美術史に関しては印象派やアールヌーボーなどの名詞だけを何となく知っているレベルであり、改めてそれぞれの時代の代表画家や代表作品、それがどのような特徴を持っているのかということを知ることができたのは、今後漱石と西洋絵画を学ぶ上で有益な情報であったと考える。

さらに、『草枕』の英訳が『Three Cornered World』と訳されるということも面白くて印象に残っている。作品のタイトルをそのまま翻訳するのではなく、作品の中身を参照した上で「四角な世界から常識と名のつく一角を磨滅して三角のうちに住むのを芸術家と呼んでよかろう」という印象的な一節を参考にタイトルとつけているところに英国的な遊び心と漱石へのリスペクトを感じた。またその一節も漱石が坪内逍遙『小説神髓』の「精神作用を知・情・意の3つに区別します」というところから影響を受けているという部分も面白いと思った。人に影響を与えるものは何度も巡り巡るものなのだなあと感じた。

また漱石に影響を与えた英国絵画のモチーフとなった場所が実際に実在しているということにも驚いた。特にミレーのオフィーリアはこの特別授業を受ける以前から存在は知っているほど有名な絵画であり、実際のモデルとなっている場所があるとは思っていなかった。そしてそのオフィーリアの絵もまた漱石に影響を与えているというから驚きである。他にも多くの絵画のモチーフがイギリスに存在しているということに興奮を覚え、漱石を通してこのようなことを知ることができると思わず、図らずもワクワクとした気分になった。

あとは猫画家、ルイス・ウェインの作品が『吾輩は猫である』の中のエピソードにヒントを与えていたことも面白く感じたし、光の画家、ターナーの作品が知識のひけらかしに引用されているということもターナーの絵画が漱石の中でどのような位置づけがされていたのかということが分かるようで興味深く感じた。

特別授業を通してまとめである「漱石作品の中で絵画作品は作品に奥行きを持たせて想像力をかきたてさせる」ということをだいたい理解できたように思うし、漱石の作品と英風景画両方により興味を持てるようになる特別授業だった。

英語コミュニケーション学科 1年 畑内あやな

私は、今回の授業で夏目漱石とイギリスの関係、英国絵画との関わりを理解することができました。まず、夏目漱石が留学先のロンドンで友達ができず、ひとりぼっちだったことを知り、偉人にも存在するブルーな過去がおもしろかったです。だからといって、ブルーな過去でありながらイギリス留学が失敗だった訳ではないのが夏目漱石のすごいところだと思います。夏目漱石が留学中に積極的に美術館や博物館を訪問して、観劇には12回行ってたと知って驚きました。自分の勝手な偏見で、夏目漱石は小説家なので絵画との関わりが少ないと思っていました。「吾輩は猫である」で水彩画の先生が登場することから、夏目漱石の絵画への関心がよく分かるのだと知ることができました。しかし、私は夏目漱石の「吾輩は猫である」の有名作品をまだ一冊読んだことがないので、今回の授業を通しぜひ読んで、夏目漱石と英国絵画との関係について知ることができたらいいなと思いました。また、津田青楓宛書簡で「生涯に一度でいいから人が見て有難い心持ちする絵を描いてみたい」という文章をみて、絵画への深い関心を知ることができました。特別授業を通し西洋絵画では、印象派、後期印象派、ラファエロ前派と流れも知ることができました。夏目漱石の作品が30数か国語に翻訳されていることにも驚きました。Three Cornered World, Cornered = 角のある、Would = 世界、というのがおもしろかったです。

特別授業の最後に先生がおっしゃっていた、「漱石作品の中での絵画作品の登場は、作品に奥行きを持たせ読者に創造する世界を残している」ということを自分自身でも感じられるように夏目漱石の作品を読んでいきたいと思いました。

〈注〉「学生記者レポート」については総合企画部の許可を、「感想レポート」については受講生それぞれの許可の下に掲載している。